

平成 24 年 5 月 10 日

株主、投資家の皆様へ

フィンテック グローバル株式会社
代表取締役社長 玉井 信光

第 18 期第 2 四半期の概況につきご報告申し上げます。

「一步後退、地力は“一部で”ついてきている。」という状況でございます。

前回 1Q の御報告においても言及いたしました通り FGF の初めての投資エグジットなどプリンシパル投資（自己投資）部門は華やいでまいりました。既投資先企業も順調に成長しております。新規の斬新な投資機会も運よく捉えることができそうです。これら投資先企業は連結対象としてはおりませんので、その成長は決算上では P/L にも B/S にも反映されておられません。株主の皆様には「エグジット（投資株式売却）」か「連結化（持分法適用含む）」という実数値に現れた時に御理解をいただけることとでございます。お待ちください。

一方で、アセットマネジメント分野が不調です。投資家から資金をお預かりし運用するこの事業の最大の重要点は「投資をお約束通りの道筋を持って成功させる」こととでございます。投資運用業の収益（運用報酬）は成功報酬に依存すべきであります。成功して投資家を喜ばせてこそ共に収益を享受するということとあります。グローバルマクロ、先端技術企業投資ともに期中においては良い成績を上げることはできませんでした。残念ですが収益はいただけません。投資家至上主義のもと業務改善しリベンジを図ります。有価証券投資・オルタナティブ投資の FGICP に関しては不調ファンドのリストラや新規設定ファンドの育成、また海外の信用度の高い歴史のあるファンドとの連携をもって立て直しを図ります。FAM に関しましては実績が積み上がり一定の御評価を頂いております「フィンテックならではのユニークな投資機会」を投資家の皆様に御提供してまいり所存です。

公共分野は赤字幅を縮小することは 2Q においては達成できませんでしたが、この分野における独占的な市場占有率が近い将来において直接的に営業収益に反映されつつあると俯瞰いたします。また、PMC のクライアントである自治体に対して、エネルギー政策の転換機運が向上しつつある現在、これまでにグループ全域においてフォローしてまいりました最先端技術系ベンチャー企業とプロジェクトファイナンスアレンジメントの実績と経験をもって打ち入ることが可能となっております。下半期において白黒はっきりさせる所存です。

以上簡単ではございますが各分野に関してご説明申しあげましたが、攻め入るべき一点は各部門ごとにはっきりしており、下半期の営業展開を見ていただきたいと存じます。

さて、かつて皆様にキモチをお伝えしてまいりました「タマイノキモチ」を読み返しました。頻繁に「中身」という言葉を「最大の懸念点」としてお伝えしておりました。感覚は覚えております。非常に高い収益を生んでいるものの、膨張する事業範囲をカバーするだけの「キーパー」つまりこの企業で唯一の代表権を持つ私の代わりに、各業務責任範囲において 24 時間「心配し」「解決策を模索し」そして「実行する」責任感と推進能力を持った組織と人材の育成が遅れていた焦りが如実にキモチとして出ておりました。

現在。決して当時に比して組織・人材とも成熟しているとは思いません。むしろこれからです。私が申し上げたいのはいまフィンテックは「変質してきた」ということです。創業の志、オーナー不在のパブリックな企業としての社会的な存在意義、を鑑みるとき、本来の金融業が持つ使命であります「クライアント企業を育て社会にはばたき役立っていたたく」「個々の人、それぞれがその生活感の中で幸福を実感する」ための役割を担う。それを実現しつつ成長していかないと「本物の金融業としての永続的な成長」は達成できない。という初心に根ざした企業に変質してきたということです。この変質に気づき自己変革に努力邁進していく人材こそが当社の「将来の中身」です。資本・資金のアロケーション（適正移動）をもって収益を生むという欧米型の投資銀行事業に「人材」は不要です。「手」と「足」が居ればよい。このスタイルはこの国にも私の志にも、ひいては株主相互の利益である当社の永続的な成長にも役に立たない。人材はいます。むしろ若手の中に育ってきております。旧来然とした得意分野のみに拘って変化に対応する努力を怠るものは自然淘汰されるでしょう。

フィンテックの次期成長期には、決して「中身が心配」というキモチを感じたくは無いですね。以上久しぶりのキモチを最後にお伝えさせていただきました。